



Kernel通信

神戸大学附属図書館 電子図書館担当

(Issue Date)

2024-08-23

(Resource Type)

other

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100491444>



Kernel 通信

第 31 号 (2024 年 8 月)



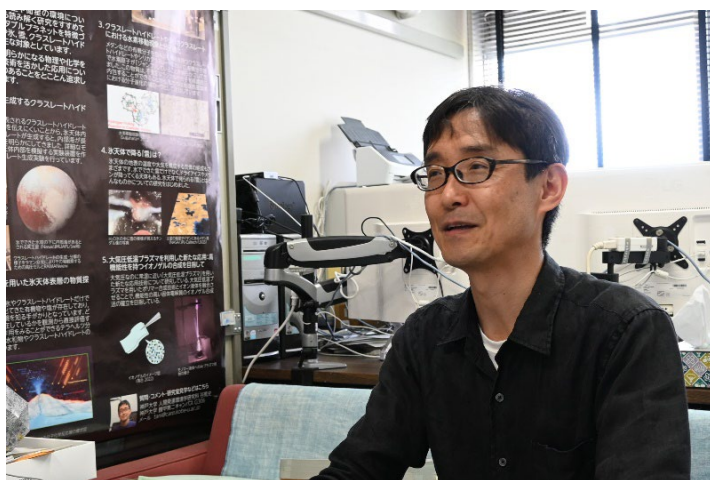
研究者紹介 谷 篤史先生

Kernel 通信では、毎号 **Kernel** で論文を公開されている研究者を紹介しています。今号では、人間発達環境学研究科で地球惑星物質科学を専門に研究されている谷篤史先生をご紹介します。

子どものころから「でっかいもの」が好きだったという谷先生のご専門は地球惑星物質科学。研究の幅も広く、放射線を使った鉱物の年代測定にはじまり、現在はメタンハイドレートが日本近海の海底でどのように生成されているかの研究や、氷天体の内部海における水和物についての研究、大気圧プラズマを使った殺菌技術の研究をされるなど多岐にわたっています。

本インタビューでは、現在の分野を専攻されたきっかけや、研究者になろうと考えた経緯のほか、これまでと現在の研究内容について詳しくお話いただきました。また、人間発達環境学研究科という環境柄、研究室に所属する学生の興味の幅や研究対象も広く、ひとりひとりの特性や興味にあわせて研究内容や指導を工夫されているという教員としてのお話も、コロナ禍における研究指導などの対応とあわせて伺うことができました。

どのような質問にも、時にユーモアを交えながら非常に分かりやすくお答えいただけましたので、ぜひ下記のリンクよりインタビュー本文をご覧ください。



 インタビュー全文

https://da.lib.kobe-u.ac.jp/da/kernel//0100491444/kernel_interview31.pdf

 **Kernel** で公開されている谷先生の論文

https://da.lib.kobe-u.ac.jp/da/kernel/search/advanced/?mode=1&kywd1=A2022&con1=c_code_auid

特集： オープンアクセスの現状とこれから（関連するセミナーに参加して）

本特集では、現在まさに検討が進んでいる「即時オープンアクセス（OA）義務化」の話題を中心に、最近の OA やオープンサイエンスをめぐる動きとこれからの課題について、関連するセミナーの内容を簡潔にご紹介します。

「NII オープンフォーラム 2024」および「JOSS2024」を視聴して

「NII オープンフォーラム 2024」と「Japan Open Science Summit2024」のいくつかのセミナーを視聴し、そこで知ったオープンアクセス（以下、OA）の現状等についてまとめます。

2024 年 7 月時点において、日本の OA に関する施策は、「学術論文等の即時オープンアクセスの実現に向けた基本方針」[\[1\]](#)に拠っています。この方針は、2025 年度から公募される競争的研究費を受ける者を対象としています。対象となる競争的研究費には、日本学術振興会や科学技術振興機構などの助成事業が含まれます。登録対象は査読付き学術論文と根拠データであり、これらの情報を学術雑誌に掲載後、即時に機関リポジトリなどに掲載する義務が課されます。具体的な方針や対応策については、統合イノベーション戦略推進会議の決定を参考にすることが推奨されています。しかし、現時点において統合イノベーション戦略推進会議で、具体的な即時 OA 化を行う方法は示されておりません。

今後の対応のために必要な課題や課題解決のための具体的な方策は以下のことが考えられます。

1. 即時 OA 要件の明確化：関係者間での協議を行い、即時 OA 要件を明確に定義することで対応を円滑化すること。
2. 関係者間での役割分担の確立：研究助成機関、NII、研究機関（図書館や研究推進部門）、研究者、出版社などの関係者が協力し、具体的な対策を進めるための役割分担を明確にすること
3. 権利保持戦略の導入：UKRI（UK Research and Innovation）や研究機関の権利保持戦略を参考にし、自らの権利保持戦略を導入することで、OA 方針の遵守を強化すること
4. 情報交換のサポート：Jisc [\[2\]](#)などの機関を活用し、権利保持戦略の導入や情報交換をサポートする体制を整えること
5. ワークフロー・システムの整備：リポジトリ登録申請や状況把握を効率化するためのワークフロー・システムを整備し、運用をスムーズにすること

これらの具体的な取り組みを実行することで、各大学等は即時 OA 対応に向け課題を解決し、効果的な対策を進めることが期待されます。

様々な機関において即時 OA 対応に向け、各種の試みが行われています。

文部科学省が実施している「AI 等の活用を推進する研究データエコシステム構築事業」[\[3\]](#)は、以下の 3 つの視点から研究活動の変革を促進しています。

1. ユースケースの形成と普及：研究データの具体的な活用事例を形成し、広めることで、研究者がデータを有効に活用できる環境を整備すること。
2. データ共有・利活用の促進：研究データの適切な管理を支援し、分野や機関を横断したデータ検索機能を構築すること。これにより研究データの共有と利活用を推進すること。
3. 研究デジタルインフラの効果的活用：スパコンやネットワークなどのデジタルインフラを有効に活用するための支援を行うこと。

この事業を通じて、全国的な研究データ基盤が構築され、新たな価値創造と研究の進展が目指されています。

さて、ここからは各大学が研究データ管理に関して行っている試みを紹介します。

大阪大学は、研究データ管理に関する教材を体系的に整備しています[\[4\]](#)。これには、全分野共通の基礎編と分野別の実践編があります。教材の内容が研究領域や組織ごとに異なるため、教材の一般化と全国展開が求められています。これには組織を越えた

連携及び、研究データライフサイクルごとの実践的教材例の作成が欠かせません。研究データ管理の重要性の浸透と、実際に何を実践すべきかの理解が必要とされています。

東海地域において研究データ管理に関し大学間の連携が行われています[5]。これは、東海地域の 20 機関が協力して、研究データエコシステムの整備、普及、利用促進を目指す活動で、具体的にはセミナーの開催や、会員機関への支援チームの派遣、事例の共有などの取組みが行われています。

現在、各機関により取り組まれている即時 OA 化への試みが 2025 年までに結実しなければなりません。そのためにまず統合イノベーション戦略推進会議での議論が進展することが待たれます。日本の OA を開花させるために神戸大学も大きな役割を果たすことが期待されています。関係機関の一層の鋭意な努力が必要です。

(伊藤)

[1] https://www8.cao.go.jp/cstp/oa_240216.pdf

[2] <https://www.jisc.ac.uk/>

[3] https://www.mext.go.jp/b_menu/boshu/detail/mext_00225.html

[4] https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/93345/2023_RDM_ALL1.pdf

[5] <https://rdm.nagoya-u.ac.jp/group/consortium/>

「困った！即時 OA」のまとめ

2024 年 6 月 12 日（水）にオンライン視聴した「NII 学術情報基盤オープンフォーラム 2024 Day2「困った！即時 OA」につきまして、以下に概要をまとめます。

2025 年度以降新規公募の公的研究費による査読付き学術論文および根拠データは即時公開が義務化されることを受けて、このプログラムでは「OA 先進国のフランス」「機関の取り組み」「NII の取り組み」を紹介する 3 つの講演をもとに国内での対応が議論されました。

各講演の資料は下記の URL から公開されています。

https://www.nii.ac.jp/openforum/2024/day2_rcos-sp.html

Implementing a full green open access policy at Inria - the reasons of success

講師：Laurent Romary 氏（INRIA（フランス国立情報学自動制御研究所）[1]）

- ・ 国内のオープンサイエンスを支える基盤として、フランスでは CNRS（フランス国立科学研究センター）[2]が 2001 年から開発、主導してきた国営オープンリポジトリ HAL（Hyper Article en Ligne）[3]を中心とする集中管理的なシステムが構築されている
- ・ HAL の中核は「持続可能性」「品質保証」「相互運用性」「可視性」の 4 原則である
- ・ 単一の技術インフラによる HAL システムは、使用する各機関（フランス国内の大学のうち 94%）におけるデータ管理コストの削減、国際的な規格/規制への準拠、新技術の即時的な全国展開、長期的なアーカイブや安定的な URL の保障、引用情報取得の簡易化など様々な利点をもたらしている
- ・ INRIA も 2005 年から研究成果の HAL への登録奨励に取り組み、具体的な科学情報ポリシーの策定や対応業務のための人員配置などの段階を経て 2013 年に登録義務化に踏み切った
- ・ INRIA で研究成果を登録すれば自動的に報告、ウェブページ作成、書誌作成まで行われるシステムが構築されており、現在では全出版物のうち約 90%がフルテキスト利用可能な状態となっている（そのうち約 80%は HAL で公開されているもの）
- ・ フランスの今後の課題として、より多くの機関への登録義務化の拡大、全ての OA コンテンツ登録の体系化、ダイヤモンド OA プラットフォームへの投資などが挙げられる

神戸大学附属図書館における即時 OA 対応の検討状況と課題

講師：花崎 佳代子氏（神戸大学附属図書館）

- ・ 各機関でワークフローを整備するために必要な情報の数々（即時 OA 化の対象となる論文やデータを誰がどのように判断するのか、モニタリングは誰がどのように実施するのか、評価や罰則が伴うのか、など）がまだ公表されていないため、現時点では「可能な範囲で早く、多くの論文を OA 化すること」「可能な範囲で論文情報を捕捉し、OA 化の前後の状況を把握すること」が求められる
- ・ 神戸大学学術成果リポジトリ Kernel^[4]へ学術論文を登録するには、Web of Science でリポジトリ担当者が論文を検索する（毎日） / KUID（神戸大学研究者紹介システム）に登録された論文データのポリシー調査を行う（データ抽出は年に 2 回） / 教員からの登録依頼をメールやウェブフォームで受け付ける（随時）の 3 つのルートがあり、業務量増加への対応 / 情報取得のタイムラグ解消 / 登録申請の効率化、というそれぞれの課題を抱えている
- ・ 現在は全学および附属図書館でリポジトリの登録申請支援機能（教員からの登録申請を受けて図書館職員が公開する）を構想しており、「①外部情報源から論文情報を随時取得・蓄積」「②認証機能により研究者がログイン」「③研究者は、①で取得した論文情報を参照・学術論文の原稿を添付し、学術論文の登録申請ができる。根拠データ情報を入力し、根拠データの登録申請もできる」「④業務者は③の登録申請内容を確認し、学術論文・根拠データの公開ができる」ワークフローを検討中である
- ・ 今後は国内の研究助成機関、NII（国立情報学研究所）、研究機関（図書館や研究推進部門）、研究者、出版社など各関係者の協議を経て即時 OA 要件を明確化し、役割分担をもとに具体的な対策を進める必要がある

OA アシスト機能との連携による OA 政策の履行

講師：河合 将志氏（RCOS（国立情報学研究所オープンサイエンス基盤研究センター））

- ・ 機関リポジトリへの論文フルテキスト登録には図書館から研究者への依頼が大きな効果（成功率が約 40%）を見せていることから、即時 OA 化においても図書館からの論文提供依頼が効果的であると考えられる
- ・ 提供依頼に際してワークフローを省力化するために RCOS と JPCOAR（オープンアクセスリポジトリ推進協会）システム開発・連携作業部会が共同開発している「OA アシスト機能」^[5]では、メタデータ検索～データ登録はメインページで、進捗管理はダッシュボードで一元的な対応が可能となる予定である
- ・ 非 JAIRO Cloud、ローカルシステム、セルフアーカイブシステムとも連携を進めていく

（谷口）

[1] <https://www.inria.fr/en>

[2] <https://www.cnrs.fr/en>

[3] <https://hal.science/>

[4] <https://da.lib.kobe-u.ac.jp/da/kernel/>

[5] <https://rcos.nii.ac.jp/service/oaps/>

即時 OA 義務化への対応がいよいよ本格化

『Kernel 通信』第 30 号でも掲載した即時 OA 義務化への対応がいよいよ本格化してきています。神戸大学も文部科学省の「オープンアクセス加速化事業」に採択され、今後 Kernel への論文・研究データ登録支援システムの実装を中心とした学内における OA 促進を進めてまいります。即時 OA 義務化の詳細と神戸大学における対応については、今後説明会等を開催し、お伝えしていく予定です。

職員 2 名がエディンバラで開催された「国際デジタルキュレーション会議」に参加しました

2024 年 2 月にスコットランド・エディンバラで開催された「国際デジタルキュレーション会議（IDCC24）」に本学の図書館職員 2 名が出席しました。本会議では主に欧米の研究者やデータキュレーターなどから研究データの整理・公開や透明性、再利用に関する実践報告や研究成果などが発表されました。加えて英国ではすでに事実上 OA が義務化されていることから、同日程にあわせてスコットランドの 2 大学に OA 義務化への対応と取り組みに関するインタビューを行いました。また同時期に職員 1 名が他大学の図書館職員と渡英し、同じく OA 義務化への取組に関する調査をイングランドの 5 機関で実施しました。

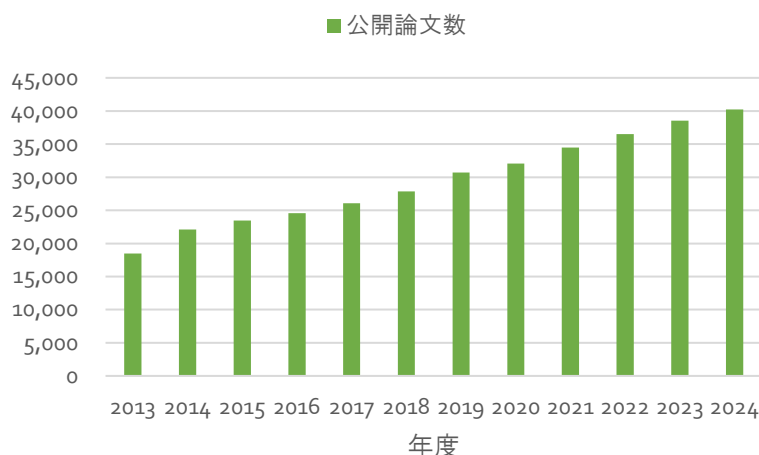
各出張の報告は以下からご覧いただけます。

・「英国オープンアクセス政策対応等調査報告会」開催報告（資料委員会）、国立大学図書館協会、

<https://www.janul.jp/ja/news/20240417>

・IDCC24 参加報告及び OA 等に関するインタビュー調査報告、JPCOAR、<https://doi.org/10.34477/0002000399>

Kernel 統計（公開論文数の推移）



2024 年 7 月末現在の **Kernel** 公開論文数は、40,206 件となり、ついに 4 万件を超えました。

「Unpaywall」のアドオンをブラウザにインストールすることで、**Kernel** で公開しているファイルに論文出版社のページからアクセスできるようになります。ぜひご利用ください。

<https://unpaywall.org/products/extension>

Kernel 通信 第 31 号 2024 年 8 月 23 日 発行

神戸大学附属図書館 電子図書館担当

特集 伊藤・谷口（オープンアクセス推進 WG）

インタビュー協力 青木・和田（オープンアクセス推進 WG）

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町 2-1 社会科学系図書館 3 階

Email : repo@lib.kobe-u.ac.jp Tel : 078-803-7333 Fax : 078-803-7336